

IV 1月22日（月）放送の番組①の問題点

本件番組は、不一家問題が多大な社会的関心を集めているさなかに、かつて同社工場で働いたことのあるA通報者の内部告発発言を取材し、放送するものであった。その基本的テーマは食の安全・安心に関するものであり、消費者および視聴者にとって大きな関心事である以上、知り得た事実を報じることは、その速報性・広域性・影響力の大きさ等において他のメディアにまさるテレビの重要な責務でもある。

しかし、速報性が求められるといっても、事実の究明をないがしろにしてよいわけではない。とりわけ内部告発発言は、多くの場合、通報者が匿名であり、その身元や立場を保護しながら取材や調査を進め、その告発内容が真実であると信じるに足る合理的根拠を収集することが必要になる。

これらの観点から本件番組の取材から1月22日放送までの経緯を検討すると、以下のような問題点があった。

1. 取材調査上の問題点

(1) 短時間の撮影取材

どのような番組であれ、丹念な取材や調査が必要なことは言うまでもないが、とくに内部告発発言に基づいて番組制作を行なう場合、何よりもまずその告発内容をていねいに聴き取り、正確に記録することが不可欠である。

ところが、本件の場合、Yディレクターの質問部分も含め、A通報者に対する撮影取材は、実質的には14分31秒しか行なわれていない。しかも、その質問はところどころで要領を得ず、何を質問しているのか意味不明のこともある。

取材陣はA通報者と、およそ1時間半にわたって面談した。Yディレクターはその間の発言内容を取材ノートに記載しているが、そもそも内部告発に基づく放送は、のちに告発された側とのあいだで事実をめぐる紛糾しがちであることを考えれば、撮影取材は可能なかぎり長時間行ない、その適切な記録保持には万全を期すべきであって、14分半という時間はあまりに短すぎる。

なお、A通報者には当日、同伴者がおり、A通報者がそちらに気を取られることが多かったという事情があったが、そうであればなおいっそう質問項目やインタビューの仕方を工夫すべきであった。

情報番組は「わかりやすさ」や「面白さ」を前面に打ち出す番組様式として定着しているが、そのために事実の背景や現象の複雑さを切り捨て、単純化に走る傾向がある。その番組制作手法が、「都合のよい発言」「使えるコメント」だけ撮影取材できればよい、という安易な取材態度につながっていないか、あるいは取材やインタビューの修練をおろそかにする原因になっていないか、番組制作関係者は点検してみる必要

がある。

(2) 取材メモの紛失

本件番組は、いったん放送が保留されたあと、主には、A通報者の告発の主要部分を裏づけるB通報者が現われ、一定のクロスチェックが可能になったと判断されたことによって、放送に踏み切る判断が下されることになったものである。

しかしながら、B通報者は、A通報者からYディレクターの携帯電話番号を教えてもらって連絡してきたのであり、純粋な第三者とは言えないことに留意すべきであった。B通報者がA通報者が勤務していた当時の平塚工場の内情にくわしく、その発言内容は信用できる、とYディレクターや番組制作幹部らは判断したが、B通報者が明らかにA通報者の関係者であることを考慮に入れば、B通報者の信用性の吟味にはいっそうの慎重さが必要であった。

とはいえ、B通報者が、Yディレクターが要請した面談や撮影取材を断わったこと、放送後1回しか電話に應對せず、その後連絡が取れなくなったこと等は、内部告発証言の周辺取材にとまなう困難さの現われであったとも考えられるので、告発内容の重大性を考慮した番組制作関係者が、B通報者の発言をA通報者の発言の裏づけとなると判断し、放送に踏み切ったことには大きな間違いはない。

しかし、Yディレクターは本件番組放送後、B通報者との電話のやりとりをメモした紙片を紛失した。また、B通報者と話したあと、再度電話した不二家広報とやりとりした際の担当者名等を記したメモも紛失している。B通報者の存在や不二家広報の取材を本当にしたのかどうかさえ疑われかねないこの不注意は責められるべきである。

『朝ズバッ!』は、曜日ごとに編成されたスタッフ班で制作されており、各スタッフに定まったデスクがなく、また放送に使用した資料等は放送後ただちに処分するなど、ほとんど日替わりで変化する仕事環境で制作されている。こうした番組制作環境が、告発された相手の名誉や人権に関わることの少なくない内部告発という微妙な情報を扱う場合にふさわしいかどうかは、大いに疑問である。このような制作環境を作り、許容してきたTBS経営陣にも問題がある。

(3) 広報窓口依存の取材

内部告発を基に番組を制作・放送する場合、通報者の発言だけでなく、それを裏づける周辺取材が欠かせない。YディレクターはXプロデューサーら番組制作幹部の指示を受け、不二家広報に何度か電話しているが、賞味期限切れ商品や返品「再利用」「再包装」等がほんとうに行なわれていたかどうか、行なわれていたとしたらどのようにしてだったかを確認するために、各地の工場やフランチャイズ店や卸問屋、あるいは他のチョコレートメーカーに行き、返品の方法やルート、廃棄や処理の仕方、賞

味期限切れチョコレートを回収して再生する場合のコスト、再生可能な工程の存否等々を確認する取材調査をするべきであった。

とくにA通報者の発言に基づき、溶かしたチョコレートが鍋状の容器に入っているところに、牛乳など乳製品を入れる工程が存在することを前提に番組を構成しようとしていたのであるから、そのような工程が果たして存在するのか否かをたしかめておくことは基本中の基本であり、そのための事実確認の方法は、他のメーカーに問い合わせるなど、上記したようにさまざまにあったはずである。

今日、一般的には、企業や官庁など組織に関する取材は、広報を窓口にして行なわれている。しかし、そのみに頼ると、通り一遍の、あるいは組織にとって都合のよい回答しか得られない。とくに内部告発のような場合、この方法では限界があり、より多角的・多方面に工夫を凝らした取材調査が必要になる。

スポーツ・芸能から政治・経済まで、幅広い話題を大量に扱う情報番組は、広報窓口を通じた取材に依存しがちであるが、深刻な争いの起こりうる事実を放送する場合、このような取材だけに頼っているのでは、真実に肉薄することはできない。

なお、これもまた本件番組放送後であるが、番組スタッフらは平塚工場周辺の住宅地を調査し、同工場の従業員や勤務経験者を探し出している。しかし、この作業も複数名をリストアップした段階で中断しており、それ以上の踏み込んだ取材調査をするかどうか躊躇いが見られる。これは、広報窓口に依存しない、文字通りの地を這うような取材を十分には経験していない習性のせいではないか、と指摘せざるを得ない。

2. 内部告発VTR編集上の問題点

(1) 時期特定の曖昧さ

本件番組は不二家問題が多くの社会的関心を集めていた時期に放送されたが、A通報者が告発した内容がいつの時期のことであったかが明示されなかったため、10年ほど前の事実としての告発であるにもかかわらず、視聴者がごく最近の出来事として誤解しかねない表現になっていた。

番組制作関係者らは「A通報者の身元を特定されないための措置」だったとヒアリングで説明していたが、他の曜日班が制作した1月18日（木）放送の『朝ズバッ！』では、不二家に関する同様の内部告発について、「12年前に勤務していた元埼玉工場従業員」と紹介しており、上記の説明は説得的とは言えない。

この点は、放送倫理上きわめて重大な問題があると考えられるが、前述のとおり、同番組はこの件について、番組②において訂正・お詫びを行なっている。

(2) カントリーマアムとチョコレートの混同

放送されたA通報者の発言中に「賞味期限切れチョコレートをパッケージし直し、

再利用していた」ことを示す発言として、「パッケージをし直すために裸にしてほしいと言われて……」と語っているシーンがあるが、取材テープ記録の前後関係から判断すれば、これはチョコレートではなく、クッキーの「カントリーマアム」についての発言であった。

放送に使われなかった取材テープの発言内容を検討すると、チョコレートについての発言中に、「賞味期限だから捨てていいんだろうと思って」いたら、「外身の皮だけをはがして」「トレーに」並べ、「それをコンテナで運んで、またパッケージされる工場にもどされるっていうことを聞いて」といった発言があり、チョコレートについてもクッキー同様に「パッケージし直し」「再利用していた」という発言が存在する。

Yディレクターのヒアリング時の説明によれば、YディレクターはA通報者を取材した際も、また取材テープを放送用に編集した際も、「カントリーマアム」がクッキーではなく、チョコレートを主体とした菓子であると誤解しており、A通報者の発言は「すべてチョコレートに関する発言であると思い込んでいた」と言い、比較的要領よく語っている「カントリーマアム」についての発言を使い、放送用に編集したのだという。

しかし、両者は言葉上は同趣旨であったとはいえ、それぞれ指し示している対象がちがう。誤解や過失であったとしても、放送倫理の観点からは問題があったと言わなければならない。ここは内部告発の核心部分であるだけに、番組制作幹部らはYディレクターと編集技術者に一任するのではなく、みずから立ち会うなどして慎重な編集作業を行ない、発言内容を正確に反映・要約する努力を払うべきであった。

3. スタジオ演出上の問題点

(1) 不正確なイラスト

本件番組の後段では、司会者みのもんたが3枚のフリップを示し、A通報者の発言のポイントをまとめているが、いずれもYディレクターとチーフディレクターが前夜のうちに図柄を相談して決めたものであった。

Yディレクターはその際、A通報者に電話し、賞味期限切れチョコレートを溶かし、再利用する工程について質問した。このときのA通報者は家庭内の都合で十分に受け答えする時間的余裕がなく、「ミルク」「粉」などと言、二言言ったあとで、Yディレクターの「牛乳みたいなものですか」という問いに、「そんな感じです」と曖昧に答えただけで、電話を切らざるを得なかった。なお、取材テープには「牛乳」「ミルク」等の言葉は記録されていない。

やむなくYディレクターらは、液状になった賞味期限切れチョコレートを入れた鍋状の器に、紙パック入り「牛乳」を混ぜ合わせている図柄を思いつき、イラストレーターに発注した。司会者はこうして作成されたフリップを使い、「その（賞味期限切れ

の) チョコに牛乳などを加えて混ぜる」と断定的に説明した。

のちにTBSは不二家広報から、「チョコレート製造には牛乳を加える工程はない」との指摘と抗議を受け、番組②において、「牛乳と断定した点は正確性を欠いていた」と訂正することになったが、これは「チョコレート再利用」という内部告発の核心を構成する情報であり、本来は取材時に質問し、正確に記録しておくべき事柄である。上述したように、放送に当たっては、そもそも鍋状の容器に入れた液状のチョコレートに副原材料を加える、という工程が実際に存在したのかどうかを確認する取材調査を行ない、確証を得た上で行なうべきであった。

(2) 伝聞と断定の不十分な区分け

本件番組では、A通報者が伝聞として語っていることが明らかな部分や、前後関係から伝聞とわかる部分を、あたかも直接体験したり目撃した事実であるかのように断定して取り扱っている箇所があった。番組中の「出荷されたチョコレートが工場にもどる」旨の説明は、その一例である。

この点は、賞味期限切れのチョコレートが回収され、再利用されているという内部告発全体の基本的前提となる事実であり、A通報者がみずからその事実を目撃しているのか、それとも誰かがそう言っていたと主張しているにすぎないのかは、視聴者がその告発の信用性を判断する上で決定的な重要性を持っている。従って、伝聞情報であることを明らかにしないまま放送したことは、「視聴者に著しい誤解を与え」る結果を生み、放送倫理上の問題となる。

この件について、TBSはのちに番組②において、『「出荷されたチョコレートが工場にもどる』は証言者の伝聞』であり、事実であるという確証を得たものではなかった、と訂正したが、これはA通報者の勤務場所や周囲の状況をきちんと聴き取り、把握していれば、容易に防ぎ得た間違いである。

なお、番組では使われていないが、A通報者の発言には先にも引用したように、「それをコンテナで運んで、またパッケージされる工場にもどされるっていうことを聞いて」などと、「伝聞」であることを明確に述べている箇所がある。この点を無視して、A通報者が直接体験した事実の告発であるかのように番組を構成し、放送したことは、そもそも「伝聞したことに関する発言」と「直接目撃したことに関する発言」の証拠価値の違いについての初歩的な理解が、番組制作関係者のなかになかったのではないかと疑わせる事態であり、猛省を促さないわけにはいかない。

(3) 根拠の薄い断定・断罪コメント

『みのもんたの朝ズバッ!』は題名どおり、司会者みのもんたがさまざまな社会的事象について遠慮なく直言し、断言する面白さを打ち出した人気番組であるが、それ

だけに番組制作関係者と出演者には、十分な取材調査に基づいた正確な判断と、的確な発言が求められる。

とりわけ内部告発に基づく番組は、多くの場合、告発の対象とされた人や組織にとっては意表を突かれる内容であり、そこで指摘された事実についての意見や確認を求められても、即座に答えられない事柄も少なくない。その意味では、一般的にこの種のテーマを扱う場合の基本主調は「問題提起」や「問いかけ」にあるべきであって、一方的な「断定」や性急な「断罪」は避けるほうが望ましい。

しかし、本件番組の主調は明らかに断定と断罪に傾き、不二家広報が放送前の段階で「返品を使うことはない」と、告発内容を否定したコメントに十分な考慮を払わないまま、次にもたらされた「確認が取れていない」というコメントを、いささかおざなりに伝えているだけである。番組の眼目が司会者キャラクターの決めつけ的言動にあるとはいえ、慎重な演出手法が考慮されるべきであった。また、スタジオのコメントターの発言も、内部告発により疑惑が生じたという取材内容のレベルを超えて、その内部告発が事実であると断定した上での断罪的コメントになっている。

なお、不二家広報は、番組①の放送後の一両日中にも、口頭とファックス送信文書によって、賞味期限切れのチョコレートが「平塚工場にもどってくることはなく」「再処理して商品化することはない」、チョコレート製造には「牛乳を加える工程はない」こと等を番組宛てに伝え、抗議している。

しかし、司会者は番組①の放送翌日の1月23日（火）の同番組において、不二家の新社長就任のニュースを伝えたなかで、「古くなったチョコレートを集めてきて、それを溶かして、新しい製品に平気で作り替える会社は、もうはっきり言って、廃業してもらいたい」と言い、また1月31日（水）の同番組でも、不二家に「異物混入の苦情が年間1693件あった」とのニュースを紹介したなかで、「異物じゃなくて汚物だね、こうなると」などと語っている。これらはいずれも、番組①の告発内容が確定的事実である、との前提に立った断定的発言である。ここには不二家広報の指摘や抗議を顧慮した様子が、いっさい感じられない。

委員会はこうした断定・断罪的コメントを発言した真意を、みのもんだ司会者に照会した。文書で寄せられた回答には、例えば1月23日の「廃業してもらいたい」発言について、みずからも父親から引き継いだ水道メーターの会社を経営しており、「(経営者は) 送り出す製品に対して全責任を負わなければならない」「お客さんに対して嘘やごまかしは絶対にあってはならない」と常々自戒していると言い、「世の中に商品・製品を送り出す経営者として、ここまできたら廃業するくらいの覚悟で、信念をもって経営にあたってほしいとの激励の思いも込めたつもりです」と説明している。

しかし、委員会では繰り返しこの番組を視聴したが、その口調や表情から「激励の思い」を汲み取れる内容とはなっていなかった、と判断せざるを得ない。

(4) 放送前の打ち合わせの不十分さ

スタジオ演出上の問題点を検討していくと、番組制作関係者と司会者を含めた出演者とのあいだの情報共有の仕組みがうまく構築されていないことが浮かび上がってくる。わかりやすくいえば、放送本番前に両者のあいだで行なわれる打ち合わせの問題である。

『朝ズバッ！』の打ち合わせは、午前4時30分から番組開始の5時30分の直前まで、約1時間行なわれている。しかし、3時間の番組中に多くのニュースや話題を盛り込んでいるので、1つの話題に割ける打ち合わせ時間は限られている。

司会者の記憶によれば、A通報者の内部告発を取り上げた番組①については、「5分程度」の打ち合わせ時間だったという。「番組独自の取材だということ」「(A通報者の)証言内容は現在のことではなく、かなり過去のものだけれども、VTRでは身元の特定を避けるために時期のことは言っていません、と言われたように記憶しています」

一方、Xプロデューサーもヒアリングの際、「明確にレクチャーしたわけではないが、(スタッフの)誰かが10年ぐらい前の話です、という話はした覚えがある」と語っており、内部告発の内容の時期が10年ほど前のことであることを知った上で放送に臨んだ点については、両者の記憶に齟齬がない。

しかし、A通報者の発言の一部に伝聞が含まれていること、3枚のフリップの図柄自体には裏付けがなく、Yディレクターらが想像して粗描したものをイラストレーターが描いたにすぎないこと等が、この打ち合わせで話題になった形跡はない。また放送前夜のうちに出演者に通知されるいわゆる「ネタ表」にも、これら重要な情報は記載されていなかった。この不十分さが、番組①の断定・断罪の主調を作り出したことは否定できない。

『朝ズバッ！』には台本がなく、司会者を含めた出演者が何を、どう発言するかは番組の流れと各人の裁量に任されている。それだけに番組制作スタッフが出演者に対して、扱うテーマについての過不足のない情報を事前に伝えておくことが大切になる。

さらに、先に見た翌23日(火)の「廃業してもらいたい」発言の場合も、放送本番前の打ち合わせが不十分だったことが見て取れる。番組制作関係者はこの段階で、不二家広報が番組①について抗議していることを承知していたはずだが、司会者の発言にそのことへの配慮がまったく感じられないのは、両者のあいだの情報共有の仕組みに問題があったからである。

『朝ズバッ！』が曜日ごとに異なる班によって制作されているにせよ、それはTBSや制作現場の都合であるにすぎない。少なくとも制作局制作プロデューサーと番組プロデューサーは責任体制上、不二家広報からの指摘・抗議を把握し、それなりの対応を考慮すべきであったし、各曜日プロデューサーも類似テーマを扱う際には相互に

連携・配慮し、司会者やコメンテーターと適切なスタジオ演出を打ち合わせておくべきであった。

こうした番組制作関係者間、また制作関係者と出演者とのあいだの情報共有の仕組みの不備が、断定・断罪の番組主調を作り出し、のちに番組②において、訂正とお詫びの放送をする原因にもなった。